

59	3	101990年11月号111号	外国人	2・29 フラフル-外国人弁護団結成される!	5		6	1	
60	4	231992年12月号131号	外国人	今春、外国人労働者の生活と権利を勝ち取る総行動を表現しよう	5		4	1	
61	5	251993年1月号132号	外国人	3・8生活と権利のための外国人労働者一日行動に参加を!	5		1	1	
62	6	271993年3月号134号	外国人	春闘で、外国人労働者の権利獲得を!	5		1	1	
63	7	281993年3月号134号	外国人	外国人労働者との連帯を築く第一歩 3・8行動	5	飯田勝泰	2・3	1	
64	8	331993年12-94年1月号142号	外国人	12・12 外国人労働者の生活と権利のためのシンポジウム(江東)	5		3	1	
65	9	341994年3月号144号	外国人	今年もやりました! 3.14 生活と権利のための外国人労働者一日行動	5		2	1	
66	10	351994年3月号144号	外国人	東京入管面会記	5		8・9	1	
67	11	391994年10月号151号	外国人	東アジア国際フォーラム・[外国人労働者の権利と労働運動]をテーマに交流	5		3	1	
68	12	401994年10月号151号	外国人	ラオのこと(前編)	5	鳥井一平	6	1	
69	13	411994年11月号152号	外国人	ラオのこと(後編)	5	鳥井一平	6	1	
70	14	421994年12-95年1月号153号	外国人	12.4 お国自慢の料理と歌で盛り上がった外国人労働者交流会	5		4	1	
71	15	491996年2月号165号	外国人	3.13 今年もやります! 生活と権利のための外国人労働者の春闘行動	5		8	14	1
72	16	531996年7月号170号	外国人	外国人の検診・医療相談会開かれる	5		5	1	1
73	17	541996年11-12月号174号	外国人	地域から、相談から 外国人労働者の自主健診を実施!	5		5	1	1
74	18	561997年3月号177号	外国人	外国人労働者の春闘、今年もパワフルに一日行動を展開!	5		12・13	1	1
75	19	591998年3月号188号	外国人	今年もやりました! 外国人労働者の春闘	5		3・4	1	1
76	20	651998年12-99年1月号196号	外国人	移住連全国ネットが国際移住労働者デー東京集会を開催	5		7	1	1
77	21	661998年12-99年1月号196号	外国人	外国人労働者健診を実施	5		7	1	1
78	22	671999年2月号197号	外国人	2月7日 外国人健康診断結果報告	5		7	1	1
79	23	681999年3月号198号	外国人	外国人労働者一日行動で労働省・厚生省に要請	5		10・11	1	1
80	24	702000年3月号208号	外国人	3.6 生活と権利のための外国人労働者一日行動	5		11	9	1
81	25	772001年3月号218号	外国人	外国人労働者一日行動で、アトムジャパンに抗議	5		6~9	1	1
82	26	802001年7-8月号222号	外国人	移住労働者に連帯する全国フォーラム2001	5		15	1	1
83	27	832002年2月号228号	外国人	10年を迎えた生活と権利のための外国人労働者一日行動	5	飯田勝泰	2	1	1
84	28	842002年2月号228号	外国人	2002年・外国人労働者健康診断	5		8・9	1	1
85	29	952003年3月号240号	外国人	2003年春の外国人労働者健診結果	5		7・8	1	1
86	30	1012004年2月号248号	外国人	入管局ホームページで外国人に関する情報提供募集?! 中止を求めて支援団体が緊急申し入れ	5		10	1	1
87	31	1012004年2月号248号	外国人	2004年外国人労働者健康診断を開催	5		11	1	1
88	32	1022004年10月号254号	外国人	メッキ作業で認定されたイラン人労働者と一緒に現場改善	5		12・13	1	1

89	33	1032005年2月号	257号	外国人	生活と権利のため外国人労働者総行動	5	6	9	1
90	34	1042005年3月号	258号	外国人	外国人労働者健康診断 2005年結果報告	5	4~6		1
91	35	1072006年4月号	269号	外国人	生活と権利のための外国人労働者春の総行動	5	8・9		1
92	36	1102007年2・3月号	276号	外国人	2007年生活と権利のための春の外国人労働者総行動 3.11マーチン・マーチで 渋谷をデモ	5	9~11		1
93	37	1132007年6月号	279号	外国人	今年も実施 外国人労働者健康診断&健康相談	5	9・10		1
94	38	1152008年3月号	286号	外国人	特集 みなさま助けてください！研修生・実習生は語る！	5	2・3		1
95	39	1252009年11月号	299号	外国人	力を合わせて 労働・生活外国人緊急相談会	5	11		1
96	1	181992年4月号	125号	外国人	労基署は外国人労働者への通訳体制を保障せよ！	8	1	1	7
97	2	431995年3月号	155号	外国人	外国人労働者の労災・職業病の予防に向けた取り組みを	8	5	1	
98	3	441995年5月号	157号	外国人	3.26~27 外国人労働者一日行動今年もやりました！「働く仲間・外国人労働者 権利白書」がまとまりました！	8	6	1	1
99	4	551997年3月号	177号	外国人	アジアの労働安全衛生活動に学ぼう！	8	1	1	1
100	5	1292010年2・3月号	301号	外国人	労働者派遣法改正と外国人労働者	8	1	1	1
101	1	131991年3月号	114号	外国人	三、一 外国人労働者に関して、労働交渉行われる	9	4・5	1	
102	2	511996年5月号	168号	外国人	外国人労働者の労働問題で労働省交渉を開催	9	4・5	1	
103	3	2003年12・04年1月号	247号	外国人	12/17 移住労働者問題で省庁交渉行う	9	6	1	1
104	4	1242009年11月号	299号	外国人	移住労働者と連帯する全国ネット 恒例の省庁交渉行う	9	9・10	1	1
105	5	1302010年2・3月号	301号	外国人	2010春の総行動 外国人労働者問題関係省庁との交渉	9	2~4	1	1
106	1	11988年3月号	85号	外国人	3.6アジアの労働者のカレパ・デーと無料医療相談を大田区で開く	10	13	1	
107	2	191992年5月号	126号	外国人	「すべての外国人労働者に医療保障を！全国集会」開催	10	10	1	
108	3	291993年4月号	135号	外国人	外国人労働者医療の現在	10	高山俊雄	8・9	1
109	4	311993年6月号	137号	外国人	外国人医療問題とSHAREの活動	10	沢田貴志	9	1
110	5	471995年9月号	161号	外国人	非定住外国人への厚生省懇談会報告書の意味	10	高山俊雄	10・11	1
111	6	481995年10月号	162号	外国人	国保裁判で不当判決でる！	10	高山俊雄	9	1
112	7	631998年10月号	194号	外国人	滞日外国人の医療保障は今！	10	高山俊雄	16	1
113	8	722000年7・8月号	212号	外国人	超過滞在外国人の医療費等の現状	10	高山俊雄	4~6	1

(添付資料4)

表 A-4 NGO機関紙「東部労災職業病・安全と健康」に掲載された労災・職業病等に関連した記事一覧表（非正規労働者、1988年9月号～2010年4月号）

整理番号	冊子(頁)号	掲載年・号	通巻	分類	タイトル	分類	執筆者	地域	原典頁	90	95	00	05
整理番号	冊子(頁)号	掲載年・号	通巻	分類	タイトル	分類	執筆者	地域	原典頁	～	～	～	～
1	1	148	1993年7・8月号138号	非正規	バイク宅配便・請負契約の労災申請	1				7	1		
2	2	150	1993年11月号141号	非正規	バイク宅配便のライダーに朗報！請負契約で労災認定	1				5	1		
3	3	167	1998年4月号189号	非正規	請負か労働者か？	1				12		1	
4	4	172	2001年5月号221号	非正規	ホームヘルパーの労災相談から	1				13			1
5	1	132	1988年4月号86号	非正規	定時制O君、バネ指で労災申請へ	2				3	1		
6	2	133	1988年4月号86号	非正規	派遣労働者に腱鞘炎発病 全国一般に加盟、労災申請行方	2				9・10	1		
7	3	135	1988年9月号90号	非正規	派遣労働者の労災＝腱鞘炎	2				12・14		1	
8	4	136	1988年11月号92号	非正規	定時制のO君、バネ指で認定勝ち取る！	2				4		1	
9	5	139	1990年新年合 併号	非正規	派遣労働者の頸腕-中央労基署が不当な業務外決定する！	2				11		1	
10	6	141	1990年12・91年 1月号	非正規	無認可保育所の保母さんの腰痛・頸腕、労災申請取組み開始	2				7		1	
11	7	149	1993年10月号140号	非正規	キーンベック病の業務上認定	2				9		1	
12	8	153	1994年6月号147号	非正規	「パートの会」レジャー作業の頸腕予防に取組む	2	塚野光子			6・7		1	
13	9	160	1996年2月号165号	非正規	出稼ぎ労働者Tさんの労災とRSD	2				6・7		8	1
14	10	162	1996年4月号167号	非正規	出稼ぎ労働者Tさん、外傷後のRSD 労災認定	2				7			1
15	11	169	1999年11月号205号	非正規	出稼ぎ労働者の過労死	2	佐々木幸孝			10			1
16	12	171	2000年10月号214号	非正規	出稼ぎ労働者の過労死に不当な不支給決定	2	佐々木幸孝			15			1
17	13	175	2003年3月号240号	非正規	締め切りと緊張と…翻訳業務で派遣社員が頸肩腕障害	2				14			1
18	14	176	2005年6・7月号261号	非正規	研究所の派遣会社社員に労災認定	2				14			1
19	15	181	2008年12・09年 1月号	非正規	終わりの見えない作業	2				10・11			1
20	1	137	1989年新年号93号	非正規	定時制生徒の労働問題を考えるシンポジウムへ	5				12			1
21	2	138	1989年3月号95号	非正規	3.10 定時制生徒の労働問題を考えるシンポジウム	5				11			1
22	3	143	1991年6・7月号117号	非正規	全国ではじめて！パートの労災上積み補償制度 江戸川ユニオン東京靴下分会	5				10			1
23	4	146	1993年1月号132号	非正規	第11回「定時制生徒の労働と健康を考えるシンポジウム」開かれる	5				5			1
24	5	156	1994年12・95年 1月号	非正規	第13回 定時制生徒の労働問題を考えるシンポジウム開催！	5				4			1
25	6	159	1996年1月号164号	非正規	第14回 定時制生徒の労働問題を考えるシンポジウム開かれる！都教組	5				5			1
26	7	164	1997年2月号176号	非正規	第15回 定時制生徒の労働問題を考えるシンポジウム開かれる！	5				6			1
27	1	151	1994年3月号144号	非正規	パートタイマーで働く労働者の労働条件・健康・安全を考えよう！	8				1			1

28	2 1551994年10月号151号	非正規	パートスタッフアーデスの採用と安全論争	8	信太忠二	7	1
29	2008年12・09年292号 1月号	非正規	特集 派遣労働者の安全と健康	8		2~9	1
30	1990年12・91年112号 1月号	非正規	江東区で出稼ぎ労働者の健診実施！	10		2	1
31	2 1421991年3月号114号	非正規	出稼ぎ労働者の健診実施結果とまる。	10		6	1
32	3 1441991年11月号121号	非正規	出稼ぎ労働者の健康を考えるついで、今冬の健診に向けて開かれる	10		9	1
33	4 145号	非正規	1992年10・11月130号 出稼ぎ労働者の健康問題	10		10	1
34	5 1471993年4月号135号	非正規	92年度出稼ぎ労働者の健診活動終了する。	10		10	1
35	6 1521994年4月号145号	非正規	出稼ぎ労働者の健診報告	10		9	1
36	7 1541994年10月号151号	非正規	出稼ぎ労働者の出稼ぎ先健診に国と県が助成を決定・秋田	10		5	1
37	8 1571995年3月号155号	非正規	94年度 出稼ぎ労働者健診終了する	10		4	7
38	9 1581995年4月号156号	非正規	94年度 出稼ぎ労働者健診の総括	10	平野敏夫	5	1
39	10 1611996年3月号166号	非正規	今年も取組みました 出稼ぎ労働者健診活動	10		5	1
40	11 1631997年2月号176号	非正規	今年も取組んでいます 出稼ぎ労働者の健診活動！	10		4	1
41	12 1651997年11月号185号	非正規	出稼ぎ労働者の健康を考えるついで	10		10	1
42	13 1661998年4月号189号	非正規	出稼ぎ労働者健診総括会議報告	10		4	1
43	14 1681999年2月号197号	非正規	今年も始めました！出稼ぎ労働者健診	10		8	1
44	15 170号	非正規	1999年12・00年206号 第9回で出稼ぎ労働者の健診を考える集い 1月号	10	平野敏夫	9	1
45	16 1732002年5月号232号	非正規	2001年度 出稼ぎ者健診報告	10		12	8
46	17 174号	非正規	2002年11・12月237号 出稼ぎ労働者の健康を考える集い 2002 開催される	10	平野敏夫	8	1

### III. 研究成果の刊行に関する一覧表

#### 書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
該当なし							

#### 雑誌等

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
吉川徹	学会だより : USE2009 (Understanding Small Enterprises 2009; 小 規模事業場を理解する国際学 会2009)	労働科学	81(1)	52-54	2010
吉川徹	医師のコラム：ツールボック スミーティングのすすめ、保 健指導シリーズ(21)	よぼう医学	440	2	2010
高橋悦子、 吉川徹、 仲尾豊樹、 Myung Sook Lee	参加型改善活動の普及に向け て-日韓参加型産業保健トレ ーニングワークショップ開催 報告-	労働の科学	64(10)	38-42	2009

#### IV. 研究成果の刊行物・別刷り

あり、本大会の統一論題における「からだの健康づくり」の側面に焦点を当てたものであった。ここでは泉博之先生（産業医科大学）の司会のもと、様々な専門領域から高齢化社会に向けた健康づくりの在り方が議論された。シンポジストの内藤久士先生（順天堂大学）は、体力・運動能力が低下している子ども達が成人することによって、この問題が将来的には全世代のものになると警鐘を鳴らした。片岡絢子先生（日本女子体育大学）は呼吸運動、姿勢保持、歩行などの基本運動教育が疎かになっている現状を口火に、健康維持のための呼吸法実践の有効性を報告した。最後に、鳥居塚崇先生（日本大学）は小規模工場の高齢労働者における運動の意義を再吟味した上で、本学会に2つの課題を提案した（①資金が潤沢にない中小・零細工場が体力・運動能力の蓄積のない高齢労働者をどのように受け入れるか？②低運動負荷の労働に従事する高齢労働者に対していかに身体的負荷を加えるか？）。このシンポジウムは今後の日本社会における産業保健人間工学の必要性と、そこで扱われるべきテーマを強調する印象深いものであった。

2つ目のシンポジウムのテーマは「職場におけるメンタルヘルス」であり、本大会の統一論題における「こころの健康づくり」に焦点を当てたものであった。ここでは、酒井一博先生（労働科学研究所）の司会のもと、医療現場、教育現場、産業現場の3領域から話題提供がなされた。まず、職場改善の専門家である古川徹先生（労働科学研究所）は医療現場のメンタルヘルス改善において重要な5領域（①保管と移動、②作業ステーション、③院内環境の整備、④福利厚生、⑤勤務とキャリア）を提唱した。広沢正孝先生（順天堂大学）は、大学校医としての豊富な臨床経験から、近年の大学生に顕著な特徴として「曖昧な自己像」をとりあげた。この自己像は就職後、矛盾に満ちた社会からの要請と直面することによって容易に破綻する。従って、確固とした自己像の形成を促進することが教育現場だけでなく産業現場でも求められるという主旨のものであった。最後に、赤津順一先生（中部電力（株））は産業医の視点から、産業現場で今後求められるメンタルヘルス教育やカウンセリング、不調者への対応の在り方の一案を述べた。このシンポジウムは、メンタルヘルスの改善活動で踏襲すべきポイントと、

大学教育から就職後まで一貫したメンタルヘルス教育の必要性を明示するものであった。

特別講演は北森義明先生（順天堂大学）により「組織に活かすチームビルディング」というテーマで行われた。長年に渡り組織開発のファシリテーターとして産業人の岐路に立ち会ってきた講演者の経験談は、改善活動や臨床を専門とする参加者にとって、とりわけ興味深いものであった。

率直に言えば、「こころとからだの健康づくり」は産業保健人間工学領域においても古典的に追求されてきたテーマのひとつであり、とりわけ目新しいものではない。しかし、本大会の参加を通してこの印象は払拭された。本大会は現代においてこのテーマを今一度扱うことの意義を示すに十分な内容を含むものであった。

（山田泰行＝順天堂大学）

### 小規模事業場を理解する国際会議2009

2009年10月20日（火）～10月23日（金）

（ヘルシンキ、デンマーク）

2009年10月20日から10月23日にかけて、デンマーク王国ヘルシンキ市のLo-skolen（労働組合学校）でUSE 2009（Understanding Small Enterprises 2009：小規模事業場を理解する国際学会2009）が開催された。ヘルシンキ市は首都コペンハーゲンから電車にて北に一時間程の距離にある風光明媚な港町である。シェイクスピアの戯曲「ハムレット」の舞台となったクロンボータ（世界遺産）が対岸のスウェーデンを望むように建っている。

本会議は中小企業における労働条件とビジネス開発を研究者と実践者として討議する第1回目の国際会議として企画された。大会長はデンマーク国立労働環境研究センターのPeter Hasle氏が努め、北欧諸国（デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド）と欧州（EU）、北米、日本などが企画委員となっている。テーマは「a healthy working life in a healthy business（健康的な企業経営における健康的な労働生活）」で、世界28カ国から約150名が参加した。参加者の3分の1が地元デンマークからで、スウェーデン/フィ

ンランド/英国/ニュージーランド 日本が各7名、カナダ/韓国が各6名、ドイツ/オランダが各5名、フランス4名、ポーランド/ノルウェーが各3名、ほか2名以下の米国、スペイン、アイルランド、スイス、ポルトガルなどに加え、中進国/開発途上国からはブラジル、アルジェリア、キプロス、チェコ、ケニア、ウガンダ、ネパールなどからの参加があった。

3日間の会議では7つのキーノート講演（全体会議）、7つのテーマに分かれたワークショップ（3つのセッションの同時進行）で構成されていた。ワークショップの一部はさらに3つほどに分かれて討議されているセッションもあった。主なキーノート講演は「リスクアセスメントの実施における中小企業の最良支援（Jukka Takala, 欧州安全衛生庁）」「小規模事業場の解決すべきこと—研究と日々の生活のなかで—（Peter Hasle, デンマーク）」「企業倫理と小規模事業場（Laura Spence, 英国）」「中小企業とインフォーマル経済における労働産業安全保健を改善する参加型アプローチ（Toru Itani, ILO）」など、小規模事業場が抱える企業経営のあり方と安全保健の視点から、研究者、中小企業コンサルタント、安全衛生担当実務者、労働組合、国際機関や行政担当者などそれぞれの立場から発表が行われた。

7つのワークショップのテーマは「企業の社会的責任（CSR）」「実践者の経験」「参加型アプローチによる産業安全保健改善」「産業安全保健マネジメント導入における仲介者（Intermediaries）の役割」「小規模事業場における化学物質曝露の予防と評価」「災害防止と安全プロモーション」「産業保健の法律・規制と介入」「公式・非公式アプローチのバランス」「オーナー経営者と家族的経営、中小企業文化とリーダーシップ」などで、各ワークショップとも十分な討議時間があり、北欧における中小企業文化を中心とした話題に欧州やアジアなどからの報告が重なり豊かな意見交換が行われた。

発表のなかで特に印象に残った2演題を報告したい。英国のHarling氏（HNS Plus：国立健康サービス機関）は、英国では1948年にスタートしたNHSのプライマリヘルスケアサービスには産業保健サービスに含まれておらず、2002年に実施した調査で英国の中小企業でほとんど産業保健サービスを受けていないこと

が明らかになったことは驚くに値せず、政策による当然の結果だとした。その結果、低収入・単純労働といった労働条件になりやすい中小企業では、労働者の健康格差に重大な影響を及ぼしている。産業保健への介入は個人の健康と社会の双方に利益があることが科学的に証明されており、NHSの保健サービスに基本的な産業保健サービスの普及をより強化する方向で検討していると報告した。英国は世界で最も死亡災害の率が低い国である。その英国でプライマリヘルスケアサービスにおける産業保健強化の方針が議論されている点は興味深い。

2つ目はカナダのGravel氏（ケベック大学）の「小企業に雇用される移民労働者への産業安全保健導入戦略」である。Gravel氏はモントリオール市で25%以上の移民労働者を雇用している50人以下の規模の20企業と、移民労働者を雇用していない企業10社を比較する質的研究により3つの異なる差異を見出した。すなわち、1）経営者が移民労働者の安全と健康の議論に対する態度の相違、2）労働者と雇用者が利用できる安全保健に関連した予防技術を持っているか否か、3）産業安全保健技術の導入における外部専門家・外部実務者の助言を得ているか否か、である。移民労働者を雇用している企業の一般的傾向は、①災害に対しては非常に誠意をもって対応するが、予防努力は無視しがちである、②安全衛生委員会はほとんどの企業で設置していない、③移民労働者は安全衛生委員会のメンバーに任命されたとしても、労働者と経営者が共に同じテーブルに着くという民主的な話し合いの場に慣れておらず、またそのような場面を避けようとする傾向にある、とした。日本でも今後移民労働者の増加が予想され、安全保健の課題が多いが、カナダの調査結果は参考になる興味深い結果である。

会議におけるさまざまな議論を通じ、小規模事業場の健康的な経営と労働者の安全保健支援のために重要と感じたキーワードは以下の6つである。「attractive work」「sector-base approach」「intermediaries」「good practice」「dialogue mechanism」「multi-channel」。

今回の会議で学んだことを整理すると、小規模企業はグローバル化のなかで新しい技術や新しい価値の創造と共にこれからも多くが生まれ、また消えてゆく



が、小規模だからこそ「attractive work (魅力ある仕事)」を創出することができる。家族的経営、オーナー経営者の理念には仕事や人生を楽しむ大きな魅力があり、それを失わせてはいけない。小企業を支援する際には、その「業界」が重要である。その業界には業界特有の健康障害リスクが存在し、また、業界特有の仕組みと解決方法がある。国の法や規制で一律制御しようとしてもうまく当てはまらないため「sector-base approach (セクター別アプローチ)」をもとに、労働組合、事業場組合、地域保健サービス、行政、コンサルタント等「intermediaries」が、改善のきっかけを与え、方針を示し、現場の改善を効果的に支援することができる。改善のためには「good practice (良好事例)」の活用を「dialogue mechanism (対話の仕組みづくり)」を活用して、「multi-channel (多チャンネル)」で進めることが重要である。

(吉川 徹)

**日本産業衛生学会産業医・産業看護全国協議会  
4 部会合同セミナー**

2009年11月5日(木)～6日(金)  
(タニタ秋田, 秋田キャッスルホテル,  
秋田県総合保健センター)

2009年11月5日(木)～6日(金)にかけて、日本産業衛生学会の4部会(産業医部会、産業看護部会、産業衛生技術部会、産業歯科保健部会)が合同で主催する、第7回4部会合同(職場改善)セミナーが株式会社タニタ秋田(大仙市)および秋田キャッスルホテル、秋田県総合保健センター(秋田市)において行われた。今回の合同セミナーは同月の5日(木)～8日(日)に秋田市で開催された、第19回産業医・産業看護全国協議会のプログラムの1つとして行われた。

この4部会合同セミナーは職場改善・作業管理のための実践的なスキルの向上を図ることを目的に、産業医、産業看護師、産業衛生技術者、産業歯科保健関係者が合同して職場巡視を行い、職場の改善すべき問題点や今後の産業保健活動に生かす良い事例を取材し、さらに参加型のグループ討議を行ってまとめた結果を全体で発表し、討議を行っている。

今回の合同セミナーでは6班に分かれた参加者約50

名が、ヘルスメーターなどの医療用具を一貫生産している工場において、プレス作業場や成型作業場、組立作業場を巡視した。全員でまず大型バスに乗り込み、チェックリストなどの説明を受けながら現場へ移動する様子はさながら遠足のようなのだが、いざ巡視が始まると各参加者が精力的に活動し次々に指摘をしていた。この合同セミナーでの職場巡視の特徴は、単なる欠陥の指摘ではなく改善を要する点として今後の改善策を促し、一方で良好事例を積極的に評価するところにある。その後ホテルに移って夕食後のグループ討議においても活発な議論が続き、各グループが思いの発表資料を作成していた。翌日朝、各グループによる発表と全体討議が、全国協議会の開会式の後に引き続いて同じ会場で行われた。この会場には工場の代表も招かれたが、いつもとは異なる視点での指摘にいろいろと気付かされることが多いとのことであった。なお今回は、過去6回の4部会合同セミナーを教材化したCDが紹介され参加者に配布された。

(村田 克)

**第49回日本労働衛生工学会・  
第30回作業環境測定研究発表会**

2009年11月11日(水)～13日(金)  
(金沢エクセルホテル東急)

戦国武将として人気の高い前田利家の菩提寺がある石川県金沢市にて、第49回日本労働衛生工学会(東洋大学教授 神山宣彦実行委員長)と第30回作業環境測定研究発表会(社団法人日本作業環境測定協会 北・信越支部長 中田憲幸実行委員長)が、合同で行われた。

発表は、一般発表59件、メーカープレゼンテーション12件、特別講演1件、セミナー1件、技術講演2件であった。作業環境測定の実務に携わっている方の発表が多く大変参考になった。作業現場での測定方法を改善するための研究や、現場の測定結果などが報告されていた。以下、発表された演題のうち筆者が特に興味を持ったものを主に報告する。

「酵素発色法による建材中の微量クリソタイトの検

医師の  
コラム

ツールボックス  
ミーティングのすすめ

職場で同僚が集まるツールボックスミーティングは、働く人の健康と安全を支援する効果的な手段と考えられます。

このツールボックスミーティングは、文字通り労働者が作業を行うその場所や病棟の様子、当日の予定などが周知されます。

会議などのミーティングが行われ、前日の入院患者や病棟の様子、当日の予定などが周知されます。

職場の不便や、短時間でのミーティングのことで、病院や介護の職場では毎朝、病棟や医局などで業務開始前に、申し送りや早朝スタッフ

など、多面的な改善のヒントが得られます。



職場で行うちょっとした集まりや小ミーティングは、ツールボックスミーティング（職場の道具箱の前での小会議、ショップフロア（現場）ミーティングなどと呼ばれ、世界中のいたる所で行われています。

労働者が参加して、その日の仕事の段取りや目標、作業の注意点やさまざまな情報



吉川 徹

グなど、さまざまな名称で呼ばれ、ミーティングが行われています。これらは皆ツールボックスミーティング

です。

健康と安全を確保する「保健」の一つではな

健師のコラム

生活の変化は  
ボの入り口!?

私は、半年前に東京へ転勤になり、単身赴任となってから、体重が6kg増えてしまいました。それに伴い、中性脂肪も基準値を超え、メタボリックシンドローム（メタボ予備群）と

職場の不便や、短時間でのミーティングのことで、病院や介護の職場では毎朝、病棟や医局などで業務開始前に、申し送りや早朝スタッフ

など、多面的な改善のヒントが得られます。

健康と安全を確保する「保健」の一つではな

## 参加型改善活動の展開と普及にむけて

～日韓参加型産業保健トレーニング  
ワークショップ開催報告～

高橋 悦子・吉川 徹・仲尾 豊樹・Myung Sook Lee

### ワークショップ開催の経緯

2009年2月2～3日に東京で「日韓参加型産業保健トレーニングワークショップ」が開催されました。筆者は、組織委員会事務局の一人として、ワークショップの企画や運営に携わる機会を得ました。本稿では、事務局からの目をとおして、ワークショップの成果について報告したいと思います。

このワークショップの目的は、日韓両国の参加型産業保健トレーニングの体験交流を行うこと、そして、現場に活用できるトレーニングツールを共同して開発することの2点です。ワークショップ開催が検討された背景には、ベトナム・カント市で2000年より開催されているメコンデルタトレーニングというユニークな国際研修の存在があります。メコンデルタトレーニングとは、東京労働安全衛生

センターと労働科学研究所が共同企画し、ベトナム社会主義共和国カント市衛生局やカント医科大学の協力のもと、アジアを中心とした世界中の産業保健関連の実践者が集まり参加型改善活動を学ぶトレーニングプログラムです。このメコンデルタトレーニングプログラムに参加した日韓両国の産業保健実践者たちが自国における参加型改善活動の一層の普及と展開をめざし、本ワークショップの企画が提案されました。

ここで少々、日韓両国における産業安全保健分野での参加型改善活動の現状について触れておきたいと思います。国際的な産業保健の潮流がグッドプラクティスを活用したアプローチを重視している背景をうけ、日韓両国でも参加型産業安全保健活動が進展しています。日本では職種別の職場環境改善チェックリスト（アクションチェックリスト等）が開発・活用され、さまざまな産業分野での参加

型改善活動に関する取り組みが進んでいます。また、日本産業衛生学会の生涯教育委員会では良好実践事例（Good Practice Samples）の収集が行われています。一方、韓国では大韓産業保健協会などが中心となり、製造業や中小規模事業場、病院・診療所、農業労働分野等において参加型改善活動が導入され成果をあげています。

このような流れの中、本ワークショップは、日韓両国の参加型改善活動の知見や経験をお互いが交流することで、アジア共通の現場に活かせるツールを開発し、さらなる参加型改善活動の進展のために何が必要であるかを確認しあう場として企画されました。

### 組織委員会による企画の検討

組織委員会は、日本の参加型改善活動の第一人者である小木和孝氏（労働科学研究所、国際産業保健学会会長）が代表をつとめ、組織委員に平野敏夫氏（東京労働安全衛生センター）、錦戸典子氏（東海大学）、国際労働財団（JILAF）、韓国側の組織委員に Myung

Sook Lee氏（大韓産業保健協会）、アドバイザーとして伊藤昭好氏（産業医科大学）、河野啓子氏（四日市看護医療大学）、事務局は仲尾豊樹氏（東京労働安全衛生センター）、吉川徹氏（労働科学研究所）、筆者の3名が担当しました。

開催国である日本を中心として、参加型改善活動に積極的にかかわっているそれぞれの立場の専門家がこの組織委員会に参画していただくことができたのは非常に幸運だったと思います。ワークショップの企画、運営を検討する段階でも、さまざまな意見やアドバイスをいただくことができ、お互いの知見や経験の交流、参加型改善活動のネットワークの広がりという本ワークショップの目的の一部が組織委員会内ですでに達成されているのではないかと感じることもありました。

組織委員会では、ワークショップ当日の運営やプログラムの進行、ツールの整理などが検討されましたが、最も時間をかけて討議した内容は、2日間という限られた時間でいかに効率的に参加型改善活動トレーニングを実施するか、という点と言語の壁をどう乗り越



集合写真 ワークショップ参加の皆さん



韓国の組織委員のメンバー

えるかという2点です。前述したとおり、このワークショップの元祖ともいべきメコンデルタトレーニングは、約1週間のトレーニングで英語を共通使用言語としています。この短縮版にすべきか、参加型改善活動トレーニングを体験するだけにとどめるか、それぞれの経験をもとに意見交換をした結果、グループワーク、ツール開発（チェックリスト）を基盤とした構成、さらには、グループワークは日韓混成のグループ構成で展開するという基本原則が決まり、これをもとに2日間という限られた時間の中で効率的かつ効果的にトレーニングを進めるための入念な準備（特に言語面でのフォロー）が進められていきました。

### いよいよワークショップ当日

一方、ワークショップの参加者は、産業保健スタッフ（安全衛生管理者、産業医、産業看護職など）、地域保健を担う行政保健師、大学院生（国際保健、経営工学など）、研究者、教育者など多種多様な人びとが参集し、日韓

あわせて32名のメンバーとなりました。日本からの参加者は前述したメコンデルタトレーニング経験者が半数以上を占め、韓国からの参加者は大韓産業保健協会のスタッフが中心でしたが、やはりメコンデルタトレーニング経験者が3分の1程度含まれており、今年で9年目を迎えるメコンデルタトレーニングのネットワークの広がりや強さを実感することにもなりました。

プログラムの概要は、表-1のとおりです。メコンデルタトレーニングにおけるPAOT（Participatory Action-Oriented Training Programme）トレーニングプログラム、JILAFがアジアで展開しているPOSITIVE（Participation-Oriented Safety improvements by Trade-Union initiative）プログラムなど既存の参加型改善活動を土台にした各種プログラムにおける方法論を参考に、2日間で効率的に参加型改善活動の基本を学びつつ、自らも能動的に参加していくといったプロセスを体験できるような構成となっています。

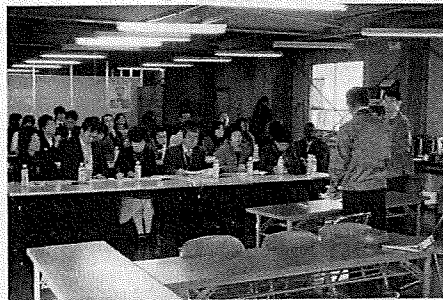
ワークショップは、まずは、現場を実際に

表-1・日韓参加型産業保健トレーニングワークショッププログラム概要

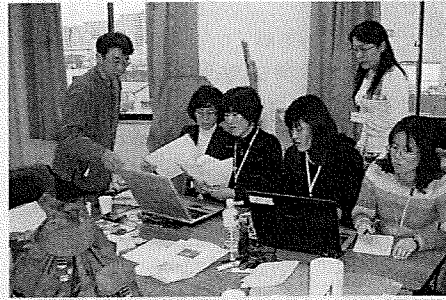
1日目（2月2日）	2日目（2月3日）
開会式 工場訪問：チェックリスト演習 グループワーク①：訪問工場の良好事例と改善点について 基調講演（小木和孝氏） グループワーク②：中小規模事業場における参加型改善活動の促進理由 グループワーク③：トレーニングキット検討、プレゼンテーションの準備	トレーニングキット発表 アクションチェックリストと技術セッション グループワーク④：発表に対する良好点と改善点 トレーニングキット総評 良好写真コンテスト 日韓参加型産業保健活動成果発表会 グループワーク⑤：成果発表会の成果と今後の課題 ワークショップの総括、閉会式

見てくること（工場訪問・チェックリスト演習）からはじまり、グループでの討議（表1のグループワーク①～④）をベースに進んでいきます。グループワークは日韓混合の4つのグループで行いました。工場訪問、基調講演や全体の発表などは通訳によるフォローがありましたが、グループワークには通訳はいません。参加者たちは、母国語と同じくらい英語が堪能な人々……であれば、何の支障もなくグループワークが展開したかもしれませんが、言語習得レベルは人それぞれで、日本語、韓国語、そして英語、時にはジェスチャーや手書きメモ、即席のイラストなどあら

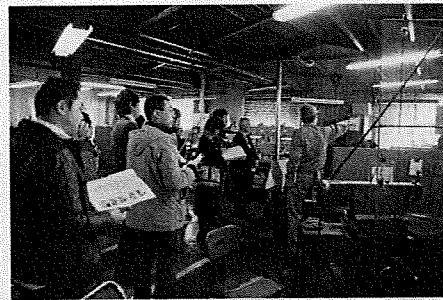
ゆるコミュニケーション媒体を使いながら、それでも非常に活発な討議が展開されました。企画段階でも、言語の壁をどのように乗り越えるかという視点での工夫（例：ポストイットの使用、パワーポイント資料は両国語で作成、写真やイラストを多用する）をさまざまに考えて当日に臨みました。もちろん、これらの工夫点は言語の壁を乗り越えるうえで有用な方法のひとつではありました。それ以上に、参加者自身の自発的な工夫、たとえば、①グループワークの発表時は日韓両国の参加者が混成して発表者の役割を担う、②発表時には言葉での説明だけでなく全身を使った表



工場を訪問し、実際に働いている人から説明を受けています



グループワーク風景



工場を訪問しチェックリストを使った演習を行います



グループワークではグループごとに技術セッションの資料を作ります



良好写真コンテストの結果発表

現方法（ジェスチャーやダンス、ストレッチなど）を取り入れる、③自分たちのグループにワークショップにちなんだ名前をつける——などファシリテーターが導くまでもなく、次々に新たなアイデアや方法が展開されていきました。

### ワークショップの成果と 今後に向けて

総括すると、2日間という限られた時間での参加型改善活動トレーニングの展開、日韓混成チームによるグループワーク展開のうえでの言語の壁など、当初想定していたさまざまな不安要素については、参加者たちの積極的かつ協力的な姿勢、そして何より各人の参加型改善活動に関する興味や関心の高さからくるモチベーションによって、いともあっさり克服できてしまったのではないかと思います。本ワークショップの成果として、①国や文化が違っていても参加型改善活動を展開するための基本ベースは同じものであることが確認できたこと、②2日間という短期間でも参加型改善活動トレーニングが可能である



グループワークの結果を発表しています

こと、③国内および日韓の参加型改善活動ネットワークの強化と広がりが実現したことが挙げられます。何よりも参加者たちの熱意と意欲の高さに支えられて、ワークショップを盛会に終えることができたことが最大の成果かもしれません。

このワークショップの成果については、7月に幕張で開催されたアジア太平洋ヘルスプロモーション健康教育学会にて参加者の一人である松原智恵子氏（東京大学大学院）により発表されています。また、今回の成功をステップに、日韓両国の参加型改善活動ネットワークをさらに強化するために、継続的にワークショップを開催していくことが参加者達によって合意されました。すでに第2回日韓参加型産業保健トレーニングワークショップ（2010年2月韓国にて開催予定）に向けて活動が始まっています。

（たかはし・えつこ＝四日市看護医療大学・助教、よしかわ・とおる＝労働科学研究所・副所長、なかお・とよき＝東京労働安全衛生センター、Myung Sook Lee＝韓国・大韓産業保健協会）

